

令和 8 年度 学校経営計画及び学校評価

1 めざす学校像

「海外大学にも近い府立高校」として、生徒・教職員共に、校訓である「自主自律」「和親協力」と、常にチャレンジするマインドを持ち、グローバルな視点で高い志をはぐくみ、主体的に生きようとする「人生の物語を編める生徒」が育つ学校 ＜生徒に身につけてほしい４つの力＞ (１) 幅広い知識と教養を身につけ、失敗を恐れず、チャレンジ精神とプラス思考で自らの将来を切り拓く力 (２) グローバルな視野で、異なる文化・価値観を持った人々を受容、理解し、協働する力 (３) 現代の諸課題に向き合い、複数の想定の中から最適解を求め、自ら考え、判断し、行動する力 (４) 「自主自律」「和親協力」の心をはぐくみ、他者や身近な社会の中で、自らの強みを主体的に発揮し、社会的貢献ができる力

2 中期的目標

１ 確かな学力と高い志をはぐくみ、すべての生徒の第一志望進路の実現を図る (１) グローバル科・普通科併設校の特色及び実績を活かして、生徒の学習意欲の更なる向上を図り、確かな学力を育成する。 ア 学校での学びと家庭学習を効果的に結びつけ、高校生として必要な基礎学力の定着をはかる。 イ 総合的な探究の時間を中心に学習活動全般で、社会人として通用する基礎的・汎用的能力の土台作りを行う。 ウ １人１台端末を活用した取組みを組織的に推進する。 エ 生徒の学習指導評価(学校教育自己診断・設問7～11)における肯定的評価を令和 10 年度 90%以上を維持する。(R5 89%、R6 91%、R7 93%) オ ３年間を見通した学習指導及び進路指導計画を活用する。具体的にはシラバスに必ず盛り込む項目を定め、十分に内容を精査して作成、それに沿った実践を徹底する。 (２) 「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」を重視した授業改善に取り組むとともに、希望する進路を切り拓く学力を育成する。 ア 生徒による授業アンケート結果等の活用。授業の「めあて」の提示・「生徒の学習活動」・「振り返り」を全教科で実践し、AL 型・PBL 型・TBL 型の授業力向上を図る。 イ 学力生活実態調査・基礎学力調査等関連資料やデータを分析・活用し、生徒の希望する進路実現に相応しい学力養成に努める。生徒の可能性を伸ばし、進路の選択肢を増やすことを視野に入れ、国公立大学型共通テスト受験者を、令和 10 年度は 120 名超とする。(R8年度新設。R7は 82 名) ウ 海外大学進学説明会・海外進学交流会をより充実させ、国内外の関係機関との連携を深めて海外大学への進学をめざす生徒を支援する。 エ 進路・学習状況を保護者に適切に提供する。 ※ 海外大学合格者数を令和 10 年度には8名以上とする。(R5:4名、R6:4名、R7:3名) ２ あらゆる教育活動を通じて、生徒の主体性・資質・能力を育成する (１) 学校における教育活動のあらゆる場面で、生徒の言語活動の充実を図る。 ア 4技能を英語授業に毎時間組み込んだ授業展開と更なる英語教育の充実を図り、卓越した英語力をはぐくむ。 「骨太の英語力養成事業」の成果を踏まえ、バランス良い4技能の修得、英語でのプレゼンテーションやディベートを中心に英語教育の更なる深化を図る。 イ CEFR を外部評価基準とし、英語学力調査をグローバル科及び普通科全体で継続し学力を伸長させる。 ※ R10 年度にはグローバル科2年生の CEFR B1 以上:72%以上、B2 以上:10%以上とする。(R5: B1 69%/B2: 2%、R6:B1 65%/B2 8%、R7:B1 58%/B2 5%) R10 年度には普通科2年生の CEFR B1 以上:37%以上とする。(R5:32%、R6:31%、R7 32%) (２)教科教育・教科外教育活動のあらゆる場面で、物事の本質をとらえ、自身の全能力を活用して理解や解決に到達できる生徒を育成する。 ア 「総合的な探究の時間」において、協働で探究のプロセスを繰り返し設定することで、生徒一人ひとりが SDGs の視点も踏まえ、課題に関連し自己の在り方生き方を真剣に考える学習活動を展開し、各教科等で身に付けた資質・能力等を活用し、主体的・対話的で深い学びの実現につなげる。 イ ロジカルシンキング・クリティカルシンキングを学び、そのスキルを習得できるよう「総合的な探究の時間」を中心に実践を広げ、通常授業へ順次導入していく。 ウ 「3つのポリシー」「関連単元配列表」「教科等横断用マトリックス表」を有効活用し、更なるカリキュラムマネジメントの充実と新教育課程編成をめざし、教科の枠を超えた学びを実践する。 (３) 多様性への理解・共感力をはぐくむ。 ア 他校の生徒や留学生との交流会を企画・立案・実施し、異なる文化・価値観への共感力と英語コミュニケーション能力の向上を図る。 イ 姉妹校訪問等も睨んだ夏期海外研修、海外大学説明会・交流会、ABIC・関学英語研修、SDGs 東南アジアスタディツアーなどで英語教育や国際化教育の機会を充実させる。 ３ 「自主自律」「和親協力」の心をはぐくむ、外部に開かれた学校づくり (１) 教育相談、保健教育、人権教育をさらに推進し、安全で安心な学びに向かう環境づくりを推進・充実させる。 ア 教員と SC の協力のもと、全教職員で教育相談を充実させ、生徒が相談しやすい環境づくりを促進する。 イ いじめを根絶すべき重要課題と認識し、未然防止、早期発見、組織的対応に取り組む。 ウ 災害や事故に備えてマニュアル整備や情報提供システムを整備し、実行性のある自然災害等に備えた体制を確立する。 エ 食物アレルギー対応委員会を中心に、校内研修等を通じて、食物アレルギー等に係る事故防止に努める。 オ 総ての教育活動で人権に関する学びを深めるとともに、保護者にも学校の取組みを周知するよう努める。 ※ 学校教育自己診断における「教育相談」(生徒)の「肯定的評価」を令和 10 年度には 80%とする。(R5:72%、R6:75%、R7:75%)「いじめ対応」(生徒)の「肯定的評価」を令和 10 年度も 90%以上とする。(R5::91%、R6:91%、R7:92%)、「災害時の情報提供」(生徒)の「肯定的評価」を令和 10 年度に 80%以上とする。(R5:59%、R6:70%、R7:70%) (２)生徒主体の部活動・行事の運営と学習との両立を進める。 ア 基礎的な生活習慣の定着を進める。 イ 生徒会を中心とした、自主的な活動を推進する。 ウ 「大阪府部活動の在り方に関する方針」に沿い、生徒の自主活動や部活動と教職員の働き方とのより良いバランスを実現する。 ※ 学校教育自己診断における「生徒会を中心とした自主的な活動が活発である」(生徒)の「肯定的評価」を令和 10 年度 90%以上とする。(R5:93%、R6:91%、R7:91%) (３)地域との連携を推進し様々な機会を通じて情報発信と協働を行う。 ア 生徒会や部活動を中心に地域のイベント、活動等に参加し、地域と連携し、共に成長する学校をめざす。 イ HP 等の電子媒体、リーフレット等の紙媒体及び学校説明会、校長ブログ等広報活動を通じて、情報発信の更なる充実に努め、本校への理解の向上を図る。 ※ 本校学校説明会・見学会ののべ参加者を令和 10 年度 3,500 名以上とする。(R5:4,200 人、R6:3,200 人、R7:3,250 人) ４ 教職員の資質向上と学校の組織力向上に向けた取組み (１) 個々の教職員の高潔な倫理感、コンプライアンスマインドと人間力の向上を図りながら、教科会議・校内研修や相互授業見学の充実、経験年数の少ない教員に対する日常指導の強化、個々の教職員の経験年数や適性に応じた役割分担による学校組織力の向上を実現する。 ア 教科会議の活用と研究授業の実践を通じた、教員の授業力向上。

イ 授業見学のシステマティックな取り組みの推進。
ウ 校務マニュアルの活用も得た、全員参加の学校運営の更なる推進。
(2) 探究学習、教科等横断用マトリックス表を活用した、教科の枠を超えた取り組みを、教員間での温度差なく推進するとともに、関係者全員で探究の授業の充実化を促進する。
ア 全員参加の探究授業の実現。
イ 教科横断型授業を常に意識することの重要性を各教員が認識し、それを各教科・科目や探究授業の指導に繋げる。
(3) 授業や校務における ICT 活用マインドの醸成と実際の活用推進。
(4)「働き方改革」を推進しながら、業務の平準化を促進し、教職員の安全及び健康の確保、職場環境の改善を図る。
ア 教職員間のコミュニケーションの質及び量の改善を図る。
イ 常に業務改善を意識し、捻出した時間を生徒との向き合いに活用する。

【学校教育自己診断の結果と分析・学校運営協議会からの意見】

学校教育自己診断の結果と分析[令和 年 月実施分]	学校運営協議会からの意見

3 本年度の取組内容及び自己評価

中期的 目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標[R7年度値]	自己評価
1 確かな学力と高い志をはぐくみ、すべての生徒の第1.志望進路の実現を図る	(1)生徒の学習意欲の向上、確かな学力の育成 ア・学習習慣の定着。	(1) ア・十分な家庭学習の上にこそ充実した授業が成り立ち、生徒の得るものも大きくなるという、家庭学習と授業が車の両輪となるような仕組みづくりを行う。	(1) ア・第1・2学年で実施している学力生活実態調査による平均家庭学習時間を、2年生 平日1時間 45 分・休日2時間 30 分、1年生 平日1時間 30 分・休日2時間とする。[2年生平日 39 分、休日1時間 2分、1年生平日1時間 13 分、休日2時間2分] イ・年間3回のキャリア教育を授業で行う。[3回] ウ・「箕面高校は、1人1台端末を効果的に活用している」(生徒・保護者)の肯定的評価を,生徒は 90%以上、保護者は 70%とする。[95%/76%] エ・生徒の学習指導評価(学校教育自己診断・設問7～11)における肯定的評価を 92%以上とする。[93%]	
	イ・基礎的・汎用的能力の育成。 ウ・1人1台端末の活用	イ・キャリア教育の充実。 ウ・授業・家庭学習に1人1台端末を効果的に取り入れ、生徒の学びの深化を図る。		
	エ・授業満足度の向上。	エ・探究学習指導室を中心に、授業アンケート(7,12 月)の課題把握と成果検証、授業見学における管理職の教員へのフィードバックを更に充実し、授業改善に結びつける。	オ・「将来の進路や生き方について考える機会がある。」「進路に関して丁寧に指導してくれる。」(生徒)の肯定的評価をともに前年並みとする。[96%/95%]。	
	オ・3年間を見通した学習指導及び進路指導計画の活用。	オ・3年間を見通した学習指導及び進路指導計画を活用する。シラバス整備とその実践を徹底する。		
	(2)授業改善及び希望する進路を切り拓く学力の育成。 ア・授業アンケート結果等の活用。授業改善。	(2) ア・授業アンケート結果等を参考に、自己・教科の振り返りを行い、授業改善に努める。 ・学習指導室を中心に、箕高授業スタイル(本時の「めあて」の提示・生徒の学習活動・振り返り・自学)に基づく授業デザインを全教科で実践し、「主体的・対話的で深い学び」の実現をめざした授業改善を推進する。	(2) ア・授業満足度 85%以上[R7 86%]。	
	イ・国公立大学への進学実績の伸長も含め、希望する進路実現に相応しい学力の養成。	イ・関連資料やデータの活用、先進校視察、外部講師による講習会の参加、校内外の優れた実践事例の研修等を通し、指導法を研究し、共有する。また、国公立大学をめざすプロセスの重要性を浸透させるとともに、特色ある国公立大学等の情報を生徒・保護者に発信する。	イ・国公立大学型共通テスト受験者を 100 名以上とする[R7は 82 名]	
	ウ・海外大学進学をめざす生徒支援。	ウ・海外大学進学説明会をより充実させ、国内外の関係機関との連携を深め海外大学への進学をめざす生徒を支援する。	ウ・海外大学進学希望者対象説明会を年間6回以上開催の継続、海外大学交流会2回は府立学校への公開実施[6回・2回] ・海外大学進学者数を4名以上とする[R7 3名]	
2 あらゆる教育活動を通じて、生徒の主体性・資質・能力を育成する	エ・保護者との連携	エ・コミュニケーション手段の多様化を図り、進路・学習状況を保護者に適切に提供する。	エ・自己診断(保護者)「進路指導面で、学校は家庭への連絡や意思疎通を、きめ細かく行っている」「学習の内容や進度等を懇談や通信などによって知ることができる」の肯定的評価 65%/65%以上とする。[62%/61%]	
	(1)生徒の言語活動の充実を図る。 アイ・卓越した英語力をはぐくむ。	(1) ア・広がる英語教育推進プロジェクトと教科内相互授業見学による研鑽より4技能教授スキルと授業プロセス改善に取組む。MINOH ENGLISH VILLAGE を継続する。 イ・統合的な英語評価(CEFR)を行い、その現状分析と課題の把握を継続し、今後の方向性と課題解決策の策定作業、そしてその実践に繋げる。	(1) アイ・グローバル科2年生の CEFR B170%以上/B2以上:5%以上とする[58 %/5%]。・普通科2年生の CEFR B1 以上:35%以上とする[32%] ・海外大学進学者は、TOEFLiBT72 以上もしくは IELTS5.5 以上をめざす。[R7は海外大学進学者 全員達成]	
	(2)非認知能力を備え、デザイン思考ができる生徒の育成。 ア・「探究学習」を主体的・対話的で深い学びの実現につなげる。 イ・「探究学習」の思考法の授業への導入。 ウ・教科の枠を超えた学びの創造・実践。	(2)クリエイティブな環境でデザイン思考を育成するプロジェクトを実施する。 ア・「総合的な探究の時間」の充実に全校挙げて取り組む。 イウ・グラデュエーションポリシーを踏まえたカリキュラムポリシーの策定、外部リソースの有効活用で、更なるカリキュラムマネジメント・社会に開かれた教育課程の実現及び観点別学習状況の評価の充実をめざし、セルフオープン授業等、教科の枠を超えた学びを創造し実践する。	(2) ア・「総合的な探究の時間」の全体発表会を年6回以上実施する[10 回] イウ・学識経験者による研修等の学びを通じて、「総合的な探究の時間」、教科における「探究的学習」とその形成的評価、教科の枠を超えた学びについての知見・実践力を向上させるための研修授業を5回以上実施[6回]	
	(3) グローバル人材育成のため多様性への理解・共感力をはぐくむ。 ア・異なる文化・価値観への共感力の向上。	(3) ア・他校の生徒や留学生との交流会を企画・立案・実施し、異なる文化・価値観への共感力と英語コミュニケー	(3) ア・他校の生徒や留学生との交流会・キャンパスツアー等の実施を通して、自己診断「国際交流の取組みが充実」(生徒)肯定的評価	

府立箕面高等学校

	イ・英語教育や国際化教育の機会の充実。	シオン能力の向上を図る。 ・本校海外大学卒業生による進路講演会を行う。 イ・姉妹校訪問等による夏期海外研修、海外大学説明会・交流会、SDGs 東南アジアスタディツアー、国内英語研修などで英語教育や国際化教育の機会を充実させる。	を 93%とする。[93%]	
3「自主自律」「和親協力」の心をはぐくむ、外部に開かれた学校づくり	(1) 安全で安心な学びに向かう環境づくりの推進。 ア・生徒が相談しやすい環境づくりの促進。 イ・いじめの未然防止、早期発見、組織的対応。 ウ・実行性のある危機管理体制の確立。 エ・食物アレルギー等に係る事故防止。 オ・人権教育の深化とその取り組みの周知。 (2)生徒主体の部活動・行事の運営と学習との両立。 ア・情報モラルと生活習慣の定着。 イ・自主的な活動の推進。 ウ・生徒の自主活動や部活動の実現。 (3)地域社会への情報発信、連携と協働。 ア・地域への協力を推進。 イ・情報発信の充実。	(1) 3年間の人権教育推進計画に基づき、講演・研修を通して生徒・教職員の人権意識・行動変容を高める。 ア・教員と SC の協力のもと、全教職員で教育相談を充実させ、生徒が相談しやすい環境づくりを促進する。 イ・いじめを根絶すべき最重要課題と認識し、未然防止、早期発見、早期発見に組織的に取り組む。 ウ・実効性のあるマニュアルとなるよう点検・見直しを行い、自然災害等に備えた体制の確立を図る。 エ・食物アレルギーの事故は、いつ、どこでも起きるものだと想定し、すべての教職員が緊急時に対応できるよう、校内研修等の充実を図る。 オ・総ての教育活動で人権に関する学びを深めるとともに、保護者にも学校の取り組みを周知するよう努める。 (2) ア・生徒の情報モラルや生活習慣の改善を図るために、日々の授業等あらゆる機会を通じて教員が温度差なく継続的に指導を行う。 イウ・「大阪府部活動の在り方に関する方針」に沿い、学習と部活のバランス及び教員の働き方と生徒の活動のバランスをとりながら成果をあげる。 ・ボトムアップ方式を導入し、生徒自治の確立に努める。教職員の意識改革も行い、「大阪府部活動の在り方に関する方針」の徹底を図り働き方改革に努める。 (3) ア・生徒会や部活動を中心とした地域のイベント等への積極的参加。 イ・電子媒体や紙媒体、各種広報活動を通じた情報発信の更なる充実。	(1) ア・学校独自の SC 相談を8回確保するとともに、定期的な相談室開放(教育相談支援委員が担当)について更なる周知に努め、自己診断「教育相談」(生徒)の「肯定的評価」前年以上[81%]。 イ・自己診断「いじめ対応」(生徒)の「肯定的評価」前年以上[93%]。 ウ・自己診断「災害時の情報提供」(生徒)の「肯定的評価」前年以上[79%]。 エ・食物アレルギー対応委員会を中心に、校内研修を年2回実施し、食物アレルギー等に係る事故防止に努める。[2回] オ・自己診断「命の大切さや社会のルール等について学ぶ機会がある」(生徒)、「人権について学ぶ機会がある」(生徒)の肯定的評価をそれぞれ 89%/91%とする。[89%/91%] (2) ア・令和8年度遅刻者数 3,500 名以下をめざす[4,940 名] イウ・自己診断(生徒)の「生徒会を中心とした自主的な活動が活発である」の「肯定的評価」93%以上。[93%] ・自己診断「生徒会活動の活性化に工夫」(教員)の「肯定的評価」93%以上[86%] (3) ア・年間 10 回の参加[R7:10 回] イ・本校学校説明会・見学会ののべ参加者を令和7年度以上とする。[R7 2回の学校説明会の来訪者約 2,000 人。進学フェア来訪者約 1,000 人]	
4教職員の資質向上と学校の組織力向上に向けた取り組み	(1) 教科会議・相互授業見学の充実・経験年数の少ない教員への指導、研修の充実、学校組織力の向上。 ア・授業力向上 イ・授業見学 ウ・全員参加の学校運営 (2)探究授業や教科の枠を超えた取り組みの深化、推進。 ア・全員参加の探究授業 イ・教科横断型授業の深化 (3)ICT の活用 (4)「働き方改革」の推進と業務の平準化。 ア・コミュニケーションの質量向上 イ・業務改善	(1) ア・教科会議を授業力向上及び生徒の希望する進路実現のための研修の場として位置付けるとともに、積極的に研究授業を行うことで、教科としての授業力向上を図る。 イ・テーマを立てた相互授業見学や外部の教員研修・講習会に参加する等、教員の授業力向上を図る。 ウ・個々の教職員の経験年数や適性に応じた役割分担を行うことで、校務マニュアルの効果的な活用をしながら、チーム箕面・オール箕面で学校運営を推進する。 (2) ア・一部の教員に偏らぬ、全教員を挙げての探究学習への取り組みを推進する。 イ・教科等横断用マトリックス表の作成深化とその活用具体化。 (3)電子黒板等の教室 ICT 機器の活用とその効果を示す。また、メールやメッセージアプリの活用の更なる徹底を進め、会議や打ち合わせ等の時間を削減することで時間外勤務の短縮等に繋げる。 (4) ア・コミュニケーションの質及び量の向上を図ることで、教職員間の温度差を解消し、教職員の安全及び心身の健康の保持、ならびに快適な職場環境の整備・促進に努める。 イ・教員の業務改善を図り、生徒と向き合える時間を確保する。	(1) ア・自己診断「『学習指導』の項目」(教員 項目 8-12)の「肯定的評価」平均 90%以上[92%] イ・全教科で研究授業年1回以上を維持[1回] ・相互授業見学教員一人当たり平均3回以上[3回] ウ・自己診断「教職員間の相互理解がなされ、信頼関係に基づいて教育活動が行われている。」肯定的評価前年以上[82%] (2) ア・イ・自己診断(教員)「探究授業や教科の枠を超えた取り組みを推進している」、の「肯定的評価」を 80%以上とする。[82%] (3)校内授業見学シート「ICT 等電子機器を適切に活用」の項目で○(良い)以上の教諭を前年以上とする。[90%] (4) ア・自己診断「気軽に相談しあえる人間関係ができている」(教員)の「肯定的評価」88%以上[86%] イ・自己診断「先生方は、生徒の意見を聞いてくれる」(生徒)の「肯定的評価」90%以上[91%] ・時間外在校等時間全教員平均を 26 時間台とする。[2月までの月平均が 26.6 時間]	